元会長　笠原敏郎先生のご逝去をいたむ

元会長　笠原敏郎先生には昭和44年6月9日ご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人　　日本都市計画学会

元会長　笠原敏郎先生のご逝去をいたむ

小　宮　賢　一

本学会の元会長，笠原敏郎先生は，去る6月9日の朝，船橋市の御自宅で永眠されました。最近御健康がすぐれず御静養中とうかがっておりましたが，肺炎のために，満87才の誕生日を目前にしてにわかに不帰の客となられたことは，まことに残念でなりません。

笠原先生はいわばわが国の都市計画の草分けの一人でした。大正7年都市計画法制の準備のため内務省に官房都市計画課が設置されるや，先生は同課第二技術掛主任技師に迎えられました。都市計画法，市街地建築物法の姉妹法の制定をはじめとして，わが国の都市計画のレールを敷いた功労者として，先生の名は，池田宏，吉村哲三，山田博愛の諸氏とともに，都市計画史上不朽にのこるものであります。その都市計画法が，先生の御逝去の5日後に新都市計画法の施行によって50年の寿命を終えたのも，何かの因縁のように思われます。

その後先生は，関東大震災後の帝都復興事業には，復興局建築部長として活躍され，その大任を果された後は，日本大学工学部教授として，都市計画，建築法規の講義をうけもたれました。

昭和11年学究生活にあった先生が満州国政府に招かれて営繕需品局長の要職につかれたことは，当時王道楽土の建設を夢みて大陸に渡った多くの若い技師達にとって，まことに心強いものだったでしょう。事実先生は彼等のよき理解者であり，指導者でありました。そして終戦後引揚げてきた旧部下を，先生は温かくむかえられ，親身に世話をされました。

又先生は，大学の同窓であられる内田祥三先生とならんで長い間都市計画，建築行政の先覚者として重きをなし，後輩達の指導に当たられました。本会の会長としても，初代会長の内田先生のあとをうけて，昭和30年度，31年度の会長をつとめられ，よく本会の今日の発展の基礎を築かれたことは，会員一同のよく知るところであります。

今でも先生のあの温顔ともの静かなお話し振りが眼前にのこっておりますが，もはや再び接することができないと思うと，限りない淋しさを禁じ得ません。謹しんで故笠原先生のご冥福をお祈りいたします。

笠原敏郎氏の略歴

明治15年6月	新潟県笠原永昌三男に生る
〃 40年3月	東京帝国大学建築学科卒業
	横河工務所技師，陸軍技師，警視庁技師を歴任
大正7年	内務技師（官房都市計画課）
〃 9年	世界都市計画会議に出席
〃 11年5月	内務省都市計画局第二技術課長
〃 13年2月	内務省復興局建築部長
昭和3年	工学博士授与（東京帝国大学）
〃 4年11月	日本大学工学部教授
昭和11年	満州国営繕需品局長（のち建築局長）
〃 18年	帰国，再び日本大学教授
〃 22年6月	日本大学名誉教授
〃 38年	藍綬褒章
〃 39年	勲二等旭日重光章

以上の他主な経歴

日本都市計画学会会長，同名誉会員

日本建築学会副会長，同名誉会員

都市計画東京地方審議会委員

笠　原　敏　郎（かさはら　としろう）

北海道拓殖銀行　鈴　木　栄　基

略歴（笠原敏郎）

明治15	（1882）年	新潟県に生まれる
同　40	（1907）年	東京帝国大学建築学科卒業 横河工務所，陸軍技師・警視庁技師を歴任
大正 7	（1918）年	内務省官房都市計画課技師
同　11	（1922）年	内務省都市計画局第二技術課長
同　13	（1923）年	内務省復興局建築部長
昭和 3	（1928）年	工学博士（東京帝国大学）
同　 4	（1929）年	日本大学工学部教授
同　11	（1936）年	満州国営繕需品局長
同　18	（1943）年	帰国，日本大学教授
同　22	（1947）年	日本大学名誉教授
同　30	（1955）年	日本都市計画学会会長
同　38	（1963）年	藍綬褒章を授章
同　39	（1964）年	勲二等旭日重光章を授章
同　44	（1969）年	逝去

明治15（1882）年６月新潟県生まれ。明治40（1907）年に東京帝国大学建築科を卒業し，設計事務所（横河工務所）に勤務した後，陸軍並びに警視庁にて竹内六蔵，伊部貞吉とともに建築法規などを担当。大正７（1918）年に内務省官房都市計画課が新設されると同時に同省技師になり，初代課長池田宏のブレーンの一人として，欧米各国の建築・都市計画法規などの調査研究を通して，1919年の都市計画法と市街地建築物の制定に尽力。その後東京・大阪を初めとする六大都市を対象にした都市計画区域の設定，用途地域，防火地区の指定あるいは建築物の形態規制などの建築行政を担当する。これらの業績からわが国都市計画のパイオニアの一人として尊敬を集めた。東京・横浜の震災復興事業では復興局建築部長として５年間にわたり土地区画整理事業における難問である建物移転工事などを担当した。昭和３（1928）年に用途地域・防火地区の指定などの実績をもとに学位請求論文「都市計画に於ける建築的施設の基本計画」で工学博士となる。翌年から日本大学工学部の設立に当たった佐野利器博士を援助して同大で教鞭をとる。構造・計画・行政など各方面に多くの人材を輩出し，今日の日大建築学科の育ての親であった。その後，昭和11（1936）年に満州国政府国務院営繕需品局の初代局長として満州新京に渡り，全満州庁の営繕のほか物品の調達，貯蔵，統制などを担当。昭和17（1942）年停年後帰国し，同18（1943）年から再び日本大学にて教鞭をとる。昭和４（1929）から２年間は佐野利器会長を同９（1934）年から２年間は内田祥三会長をそれぞれ補佐して日本建築学会副会長をつとめる。その後，昭和30（1955）年から２年間日本都市計画学会会長を努め，同38（1963）年藍綬褒章，翌年勲二等旭日重光章を授章。昭和44（1969）年６月９日船橋市の自宅にて逝去。享年87才であった。内田祥三とは大学の同窓。趣味はゴルフ。

笠　原　敏　郎

内務省都市計画課時代に師事した亀井幸次郎によれば，笠原が係わった仕事として印象に残るものに，大正11（1922）年ごろの皇居前広場を中心とした官庁街の総合計画があり，また，同９（1920）年から翌年にかけての東京駅東口に通じる広路（槙町線：現八重州通り）の計画では，内田祥三，中沢誠一郎とともに事業化に向けた調査に取り組んでいたことだった。そして性格は「終始一貫，清廉潔白で廉恥を重んじる教育者であり，口数は少ないが常に冷徹な科学者態度を失わず，近寄りがたい威厳を備え，石橋をたたいて渡らない男というのが一般的評価であった」という。